

平成27年度

小金井平和の日記念行事

「平和作文集」

小金井市

はじめに

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を3年ごとに行っています。昭和28年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年12月20日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和35年10月3日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和57年4月1日には、世界の唯一の核被爆国として、また、平和憲法の本質からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和54年3月20日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「非核平和映画会」、「平和行事参加の旅」、「原爆パネル展」、「平和講演会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和市長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成26年12月18日に戦後70年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づいて実施した平和の日記念行事における作文コンクールの応募作の中から6編を選定し、文集にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にさせていただければ幸いです。

平成28年3月

企画財政部広報秘書課

目 次

【入賞作文】

中学生の部 大賞

「平和」とは何なのか。」

一瀬 美貴乃（小金井市立東中学校 2年生）・・・・・・・・・・ 1

中学生の部 優秀賞

「平和」とは何なのだろう」

木下 実咲（小金井市立緑中学校 2年生）・・・・・・・・・・ 3

小学生の部 大賞

「平和を知って続けるために」

畔田 詩央（小金井市立小金井第二小学校 6年生）・・・・・・・・・・ 5

小学生の部 優秀賞

「平和な世界を築くために」

藤田 咲月（小金井市立緑小学校 6年生）・・・・・・・・・・ 7

「せんそうは大人のケンカ」

高柳 百花（小金井市立小金井第四小学校 2年生）・・・・・・・・・・ 9

【佳 作】

「平和とは何か」

矢田 結希子（東京学芸大学附属小金井中学校 2年生）・・・・・・・・・・ 11

大 賞

「平和」とは何なのか

一瀬 美貴乃（小金井市立東中学校 2年生）

「平和」とは何なのか。辞書で引くと「戦いや争いがなくおだやかな状態」「心配やもめごとがなく、おだやかなこと」などと説明されている。「平和」でいること「平和」であることは本で読んだり聞いたりしたことがある。皆が皆こう思うのは「平和」がものごとの理想の姿だからではないかと私は考えた。「平和」でいることは大切なこと、これは私も今まで深く考えずに常識だと思っていた。けれど改めて「平和」という言葉を前にして平和とはそもそもどういうことなのか少し疑問をもった。

私なりの解釈では「平和」は皆が気持を尊重し合い、おたがいを大事にすることで生まれるものではないかと考えられた。

具体的にどういうことなのか例を挙げて説明していきたい。おたがいを大事にするということはすなわち認めあうことである。例えば、友達と同じ色鉛筆を使っていておたがい黄色を使いたかったらゆずり合う、という小さなことから電車の中でお年寄りの方に席をゆずることや、肌の色が異なっても国籍が異なっても差別しないといった大きなことまで全てのことに共通して、おたがいに認めて謙虚になれば気持ち良い。また、相手を受け入れなかったら険悪な関係にもなりかねない。少し大げさだと感じる人もいるかもしれない。けれど、色鉛筆一本のゆずり合いという行為を世界中の人がしたら戦争はなくなると思う。これが世界の「平和」につながる、第一歩となるのではないだろうか。

また、「平和」を生むためには何をすれば良いのか。「平和」の対義語ともいえる「戦争」について考えてみる。反対のことは、光のあて方次第では見えてくるものが変わる、つまり「平和」を生むための手がかりがあるかもしれないと思ったからである。戦争とは何か。これも辞書で引くと「いくさ。特に国家間で互いに自国の意志を相手国に強制するために武力を用いて争うこと」「軍隊と軍隊が兵器を用いて争うこと」などと説明されている。簡単にいうと平和は争いのないことであり、戦争は争うことである。戦争を平

和という状態に変えるためには、戦っている者同士がおたがいを理解することが必要であると思う。しかし、戦争をする程関係が悪い相手のことを理解するのはそう簡単にできることではないというのが現実だ。ならば、もともとそんな関係になる前に互いに理解できると良いのではないか。日本もその他の国も少しずつでも周りの国との理解を、さらに深められるとより「平和」という状態に、姿に近づけると思うのだ。

「平和」の重要性について、これを伝えている一人の女性がいる。ノーベル平和賞も史上最年少で受賞している、マララ・ユスフザイさんだ。彼女は、女性の差別問題に正面から向き合い銃撃を受けながらも訴え続けているという偉大な人だ。性別で分けることも争いつまり戦争が起こる原因にもなる。また、差別されて苦しんでいる人がいるのではとても「平和」と言える状況ではない。男女共に、「平和」と呼べる日が来る事を願って今まさにこの瞬間も活動している彼女を尊敬して私も願いたい。彼女は国をこえて世界中の人々に男尊女卑の考え方をなくすことを発信している。これに世界中の人が注目しているのだから本当にすごいと思う。

さて、今私達がこの「平和」が大切であるということを知りにより深く理解してもらうには何をすれば良いのだろうか。今できること、私が実践していきたいと思うことは二つある。一つは、自分が思っている「平和」に対する気持ちを周りの人に伝えることだ。まずは、一番身近な人である家族から始めていきたい。話せば、相手も何か考えを話してくれるかもしれない。そこで、自身の考え方と比較することもできる。さらに、相手が考えてくれるということはその人が平和について少しでも考えてくれたということなのでこれが連鎖してゆけば、気付いたら周りの人が皆一度は「平和」と向き合ったことがあるというようになる日が来るかもしれないのである。もう一つは、「平和」について調べることだ。周りに発信してゆくのなら、自分の知識は多い方が良いと思う。だから、たくさん本を読んだり、インターネットで検索したりして多くの知識を身に付けておきたい。

「平和」は世界共通でものごとの理想の姿だ。世界の中の日本の中のたった一人の国民である私だが、今自分にできることをして身のまわりから少しずつ「平和」といえる状態であるものごとを増やしていきたいと思う。

優秀賞

「平和」とは何なのだろう

木下 実咲（小金井市立緑中学校 2年生）

私たちは「平和」という言葉をよく口にする。戦争などの争い事だけでなく人間関係において使ったり、様々な場面でこの「平和」という言葉を使っている。

「平和」という言葉は、会話や文のニュアンスで多少意味が変わってくる。しかし、「平和」のまわりの文章を消し、この単語のみになったとき、どんな意味を持つのだろうか。そして、この単語を聞いたとき、何を思い浮かべるのだろうか。大抵の人は、「戦争」を思い浮かべると思う。私もその一人である。

以前、私は、社会の授業で広島原子爆弾についてやったことがある。そのとき、一人一人意見を述べる場があった。ほとんどの人が「戦争は悪いことだし、これからも平和でいるために、後世に伝えていくべきだ」と言った。しかし、物事を実際に体験した人たちが伝えたい「平和」と私たちが学習をしたことで感じた「平和」が異なっているかもしれない。両者も「戦争」がない世界というおおまかな意味は同じだが、深く探っていったときに「恐怖から逃れる」ものなのか「幸せに暮らす」ものなのかで全然違ってくる。この二つを比べてみる。

まず、「恐怖から逃れる」こと。恐怖にもたくさんの意味がある。戦争で街が焼かれて人が死んでいくことへの恐怖、親や先生から怒られるのではないかと恐れること、自分がいつ危険にさらされるか分からない恐怖、ジェットコースターやおばけ屋敷で感じるスリリングな恐怖。どの恐怖にしても、恐怖状態から抜けだせば「平和」につながるのだ。

「幸せな暮らし」。一人一人が感じる幸は実に十人十色であるが、この幸せという何事もなく安らかな状態が「平和」に繋がる。

私たちが考えている戦争についての平和は、「幸せに暮らす」といより、自分や大切な人の命が消えたりする、そして戦争という未知の世界への恐ろしさから逃れるという意味合いの方が強い。だが、戦争を体験した人からす

れば、恐怖というより、「家族全員が一つ屋根の下で暮らせる」ことが何よりの幸せで、それが「平和」への第一歩なのではないかと考えていると私は思う。実際に体験したかしてないかで異なる「平和」になるのだ。

2011年3月11日。東日本大震災だ。それまで地震は何度か体験してきて、起震車で震度7を体験したこともあった。けれども、あの日の恐怖はどんなに頑張っても、二度と体験することが出来ない。家族と会えるか分からない不安と、自分の命に対する不安が一気に押し寄せてくるのだ。私は助かったけれど、津波で大切な家族を亡くした人はたくさんいる。その中でも、避難所で少ない食料や水、ガスなどを駆使して生活出来るだけで幸せだと、また、家族でいられる時間が一番幸せな時間だと、東北で被害にあった友人が言っていた。私が学校の授業で読んだ、東北で被害にあった人の作文にもそう書いてあった。

体験した人にしか分からない、単なる「恐怖から逃れる」でない「幸せに暮らす」という「平和」を未体験の人に分かってもらえれば、みんなが笑顔で暮らせる社会につながっていくのだと思う。

戦争中は、兵に行ったり、疎開をしたりと家族全員が一つ屋根の下で生活をするのはほぼ不可能である。兵に行ったら、生きて帰れるかも分からない。だからこそ、現在の社会で兵に行くことはないが、いつ家族が、自分が、危険にさらされるかは分からないから家族全員でいられる幸せな時間を、1分1秒たりとも無駄にしてはならない。私は今、家族全員で一つ屋根の下に暮らしている。つまり、私は幸せである。この「幸せ」を世界中の人が知ることが出来たら、紛争などの争いもなくなってくるのではないか。たとえ、家族を失っていたとしても、自分が生きていることに誇りを感じられると思う。その「幸せ」や、「誇り」一つ一つが「平和」につながる。

まずは、一人一人が「幸せ」になれるようにならなくては本当の「平和」になることは不可能なのではないか。

大 賞

平和を知って続けるために

畔田 詩央（小金井市立小金井第二小学校 6年生）

学校へ行って様々な勉強をすること、友達と遊ぶこと。安心して住める家があり、食事をするということ。そして、天気の良い日に見上げる青い空には白い雲が浮かんでいること。このような、今の私たちにとって当たり前の生活が平和なのだと思う。

私は、「平和」について思うこと、考えることを作文にしようとする、悩んでしまった。そこで、「平和」の意味を、国語辞典で調べてみた。すると、「戦争や争いがなく、世の中が穏やかにおさまっていること。」という意味だということが分かった。そして、対義語は「戦争」。その「戦争」が起きると、どのようなことがあるのだろうかと考えてみた。すると、だんだん「平和」が見えてきたのだ。

約70年前は、今は平和な日本も大きな戦争に参加していた。そのころの人々は、いつ、だれが命を落としてもおかしくないような日々を過ごしていたのだ。

現在の私たちが見るきれいな空は、写真に納めたり、絵に描いたりして残す人も多いと思う。しかし、戦争をすると、爆弾が降ってくる恐ろしい空へと変わってしまうのだ。現在私たちが見ている空を、戦争中の人々はきっと、怖い、つらいといった気持ちで見っていたのだろう。同じ「空」を、同じ「人間」という生き物が見ているということに変わりはないのに、産まれた時間が異なるだけで、全く違う見方をする。このようなことがあってはならないと思う。

人間が始めた戦争で、人間が作った爆弾を使うことによって、怖い、恐ろしい思いをするのは、人間だけではない。今では、私たちが楽しむために訪れる動物園だが、戦争中の動物園にいた動物たちがどんどん殺されていったのだ。何故、そのようなことが行われたのだろうか。それは、爆弾によって動物園の檻が壊れて、自由に動くことができるようになった猛獣たちが、人間を襲うかもしれなかったからだ。餌に毒を混ぜたり、餌をあたえなかった

りして、人間の勝手な都合により殺されていった。

この事実がかかれた絵本がある。それは、『かわいそうなぞう』だ。戦争中の上野動物園にいた三頭のぞうの話である。殺されてしまう猛獣も、それを実行しなければいけない人間もつらい思いをした。『かわいそうなぞう』を読んでこの事実を知ったら、「今が平和なのだ」と思うようになった。

そして、この「平和」を守っていくために私たちに来ること、していかななくてはならないことは、どのようなことだろうかと考えてみた。

まずは、戦争をしていたという歴史をきちんと知ることが大切だと思う。事実を知ることによって、今が平和であると感じられるからだ。

少し前の新聞に、戦争中の遺骨、遺留品収集のボランティア活動をしている大学生たちの記事があった。それは、太平洋戦争中の日本で唯一の激しい地上戦が繰り広げられた沖縄で見つかった。旧日本兵のものと思われる印鑑が、様々な経緯を経て、北海道の遺族のもとへ返されたというものだった。そして、このような活動について、くわしく調べてみた。

戦後70年たった今でも、戦争によって命を落とした100万人以上もの遺骨が現地に残されたままになっている。その遺骨や遺留品収集のボランティアとして、学生などの若い世代が活動しているのである。参加した学生たちは、遺骨や遺留品に実際に触れることで、亡くなった人に思いをさせ、戦争を『自分自身のこと』や『家族のこと』などといった、身近なことに置き換えて考えるようになったという。「遺骨収集は、戦争を伝えていく一つの手段だと思う。」と話す大学生もいたそうだ。

私は、4年生のときに、家族旅行で沖縄を訪れ、海で泳いだり、日の出を見たり、水族館へ行ったりと楽しんだ。平和記念公園や、ひめゆり学徒隊の資料館などの戦争に関係する場所にも行ったが、沖縄で過した時間の多くは楽しみの時間だった。しかし、ボランティアの活動をした学生たちは、楽しみのためではない、別の目的をもって行っている。私は、それがとてもすごいことであると思った。

今の平和をずっと続けていくためには、遺骨、遺留品収集の活動や平和を守るための活動について知ること、そして、戦争をしていたという歴史を深く知るといことが大切だと思う。また、その知ったことを後世に伝えていくことが、私たちの使命であると感じた。

優秀賞

平和な世界を築くために

藤田 咲月（小金井市立緑小学校 6年生）

緑小学校のとなりにある浴恩館公園。その中にある文化財センターで「戦時下の生活」という企画展が行われていました。戦争中の様子を紹介する写真や絵、千人針や出征旗、子供たちが使っていた教科書、新聞や雑誌などが展示されていました。また、小金井市出身の特攻隊員で、硫黄島に出撃して戦死した鈴木辰蔵さんの遺品もありました。

鈴木辰蔵さんは、昭和20年2月21日19才の時に、800キロの爆弾を積み込んだ爆撃機に乗り込み、硫黄島沖でアメリカの輸送艦に体当たりして亡くなりました。出撃の3日前に書いた遺書が展示ケースの中に取り残っていました。「人情の常として、万感胸に迫るものがあります。が、我々は総てを忘れて、敵艦目がけて殺到するのみ」と書かれていました。私には難しい文章でしたが、特攻隊員としての複雑な気持ちが鈴木さんの心の中に入り混じっていて、そんな不安な気持ちを必死におさえながら、出撃したのではないかと思います。鈴木さんの必死の覚悟と、家族の祈るような思いが、一つ一つの遺品に残されていて、とても悲しい気持ちになりました。

鈴木さんに関するもの以外で最も目に留まったのは、「防毒面」の模型でした。「防毒面」とは、ガスマスクのことです。このようなものを一人一つずつ準備していたことに、私はとてもおどろきました。敵が毒ガス兵器を使うことを想定して、国民に準備するように呼びかけられていたということです。販売されているしっかりした作りの「防毒面」もありましたが、全ての人が買えるわけではなかったため、紙・セロハン・炭・脱脂綿などを使って、それぞれ作るように指導されていました。教科書や雑誌に、作り方がのっていて、子供も自分で作ったようです。紙で頭全体が入るような箱を作り、目の部分にはセロハンを貼り、口の部分には脱脂綿と炭を入れた小さな箱を取り付けるといったものでした。使用する時には、針金で作った鼻ばさみで鼻をつまみ、口でゆっくりと呼吸するのだそうです。このようなマスクで、毒ガス兵器に対応できるとはとても思えず、少しあきれてしまいました。けれど

も、当時の人々は、本土決戦に備えて、必死の思いで作っていたのでしょう。一方でこれを準備するように指示していた指導者たちは、どう考えていたのでしょうか。このようなもので対応できると信じていたのでしょうか。本当に神風が吹くと信じていたのでしょうか。

知らないことは恐ろしいことだと思いました。そして、まわりに流されて自由がないのは、とても怖いことだと思いました。戦争中は反対意見を言うことが難しく、人々の心までおかしくなっていたのだと思います。

情報が制限されていた戦争中とちがい、今は情報があふれています。けれども、たくさんの情報の中から、正確な事実をとらえるのは難しいことかもしれません。伝える人、受けとる人によって、情報の意味がびみょうに変わることもあるからです。同じことに対して、ちがう感想を持つ人がいるのは、よくあることです。事実をどうとらえるか、それをどう判断するか、見極めるのが難しい場面は、たくさんあると思います。

学校の社会の授業で歴史を勉強し、国語の授業で戦争と平和について考えて、今の生活はこれまでの歴史が積み重なってできているということが分かりました。そして、歴史から学べることがたくさんあると思いました。戦争でつらい経験をした人々の思いを受けつぎ、どうしたら平和な世の中にしていけるのか考えて実行していくことが、私たちの役目だと思います。

私の目標は、色々な情報を集めて物事を総合的に判断できる力を身に付けること、そして、思いやりと勇気を持って行動することです。戦争のためにたくさんのお金と時間を使うのではなく、人々が笑顔で暮らせる平和な世の中にしていくために、弱い立場の人々にも寄りそいながら、未来に向けて進んでいきたいと思っています。

優秀賞

せんそうは大人のケンカ

高柳 百花（小金井市立小金井第四小学校 2年生）

「いきができなくてくるしいよ」

「こわいよ」

「だれかたすけて」

「火があついよ」

「おなかがすいたよ」

「こんなところから早くにげたい」

「みんなだいじょうぶかな」

せんそうを体けんした子どもたちはきっとこんなことを思ったのだと思います。

今の日本はへいわだけれど、むかしの日本ではせんそうがありました。今でもせかいではせんそうをしている国がいっぱいあります。せんそうをしているのは同じ人間なのに、どうして人が死んでしまうようなことをするのか。

せんそうは、子どもからみたら大人のケンカみたいです。大人は子どもたちがケンカをしたら「早く仲なおりをしなさい」とか「ケンカはしちゃいけません」とかいつているのにどうして大人はやっているのか。何のためにするのか。せんそうは子どもやお年よりや体のふじゆうな人をこまらせるし、何もいいことはありません。

わたしはせんそうをけいけんしたことがないけれど、本をよんだり、テレビでみたり、人にきいたりして、少しだけせんそうのことが分かりました。

せんそうで一ばんかなしむのは子どもです。子どもには、しょうらいのゆめがあります。大人のかってな考えで、ゆめがこわされてしまいます。ひどいときには、じゅうやばくだんでころされてしまいます。そんなことはしてはいけません。

わたしのおじはアメリカ人です。むかしはせんそうをけいけんしたぐんじんでした。おじは「せんそうをするのもりゆうがある。」といていました。が、わたしはどんなりゆうがあってもぜったいにせんそうはしてはいけない

と思います。

むかし日本でも、せんそうがありました。東京、こうべ、ひろしま、ながさき。ほかにもいろいろなところでせんそうのひがいがありました。とくに、ひろしまとながさきではげんしりょくぼくだんというものがおとされました。このぼくだんはふつうのぼくだんとちがって、たてものをこわしたり、かさいがおきるだけではなく、生きのこった人のけんこうまでこわしてしまいます。その人だけではなく子どもやまごのときまでけんこうひがいがつづきます。

またせんそう中は、ごはんもたくさん食べられません。おこめ、パン、ぎゅうにゅう、ほかにもあたりまえのように食べているものが食べられなくなります。だからすききらいをしないで、食べるものがあるだけでかんしゃしなくてはいけません。今でも食べるものがなくてこまっている人がたくさんいます。その人たちのことを考えて、かんしゃをしながら食べなくてはいけません。

せんそうを体けんした子どもたちへ

せんそうをみるのはつらかったよね。けれどそこからにげるわけにもいかなないよね。本当にこわかったし、いやだったよね。だから、あなたたちが大人になったときには、せんそうをしないへいわなせかいになるといいね。そのきもちをわすれないでね。せかいじゅうのこどもたちが思いつづければ、ぜったいにせんそうはなくなるよ。

せかいじゅうのせんそうをしている人たちへ

何でせんそうをするのですか。何のためにせんそうをするのですか。すべての人にやさしさがあふれていたらせんそうになりません。ゆめをもっている子どもたちまでまきこむのはひどいです。子どもはだれもせんそうなんてしてほしくないです。子どもたちのゆめをこわさないでください。へいわなよのなかをかえしてください。

おねがいします。せんそうはもうおわりにしてください。

おねがいします。もう人をきずつけないでください。

おねがいします。もう人をころさないでください。

おねがいします。子どもたちのゆめをこわさないでください。

せかいじゅうでせんそうがなくなって、へいわになりますように。

佳 作

平和とは何か

矢田 結希子（東京学芸大学附属小金井中学校 2年生）

「平和とは何か。」21世紀に生まれ、生命を脅かされることもなく生活してきた私にとってこの問の答えを出すことは容易いことではありませんでした。

私は家族と共に広島を訪れました。平和記念公園や広島平和記念資料館に行き、原爆の惨めさや被害の悲惨さを知りました。特に私が印象的だったのは、皮膚が爛れた人に似せて作られた展示物や70年前の広島の街の縮小模型が展示されていた広島平和記念資料館でした。原爆の熱で変形したビンからは原爆の威力の大きさを知りました。また、被爆して亡くなられた方々の遺品からは生きていられることの喜びを感じました。そして、原爆投下直後の広島の写真からは、戦い、争いの恐ろしさを学びました。これらを含め、私が当時広島で見たり感じたりしたことを通じて戦争は大切な命を奪っていく怖いものだとわかりました。

私は中学校に進学し、1年の時に、広島で被爆された方のお話を聞く機会を得ました。その方は講演の中で、原爆が投下されたときの様子やその後の街の様子をありありと話してくださいました。その中で私が特に心に残っていることは、その方が原爆投下の直後の広島市街地の様子についてのお話です。その中でも重いやけどを負った多くの人をその方が車の上に乗せるとき、どのように大人数の人を移動したのか覚えていないとおっしゃったところはとても驚きました。私は忘れてしまうことはあっても、記憶がないということはないからです。自分が忘れたいと思わなくても本能的に脳が忘れさせたのだともおっしゃっていました。それが本当だとするなら、自分の意思でなく記憶が消えてしまうほど、痛ましく残酷なものだったのだらうと思いました。このとき私は初めて被爆者の方から直接当時の様子を知ることができました。しかしそれは、思っていた以上に生々しく過酷なものでした。当時の体験を今再び体験することはほぼ不可能なことです。しかしあの頃に思いを馳せることはできます。このお話から、戦中の様子を想像して当時の人や

ことについて知ることができるようになりました。それが当たっているかはわかりません。しかし戦中と今を比べて、今の恵まれた生活や先人方の努力に感謝することができるようになりました。

去年は第2次世界大戦の終戦から70年の節目の年でした。新聞やテレビなどで特集が組まれて私も戦中の情報と多く触れることができました。それまで知らなかったことがたくさんありました。特に外国や沖縄では地上戦が繰り広げられ、その地に住む人までが命を落としたと知ったときはとても驚きました。そこに生活をしているだけで戦争に巻き込まれてしまっていたからです。また学校でも戦争に関する授業を行いました。その中で女性が看護要員として戦地へ行っていたことを知りました。それまで女性は男性にかわって家を守っていたとっていました。しかし男性と同じように戦地に行き、その地で病気やけがをした人を看護した女性がいたのです。その女性の中には戦地で亡くなられた方もいます。これを知って私は一番に勇ましいと思いました。女性が家の中で働き男性の目下だったころです。女性が戦地に行っていたのです。しかし、その人の家族はどれだけ不安だったのでしょうか。看護をしながら帰りたいとどれだけ思ったことでしょうか。女性のみならず、男性でも同じことが言えると思います。インターネットなどが使える今でも家族と離れて暮らすのは心配です。連絡手段も少なかった当時どれほど気を揉んだことでしょうか。想像絶します。

私は今、改めて平和とは何かを考えます。自分や家族の^{いのち}生命の心配をしないで穏やかで安定した暮らしができていて、皆が笑顔で暮らせることだと思います。

しかしこの平和は、今まで生きてこられた先人の途切れることのない努力や尽力により手に入れたものです。努力をし続けることは苦しいことかもしれませんが、しかし苦しいからと言ってその努力をやめてしまうことはもっと苦しく恐ろしいことだと思います。だから平和への歩みを決して止めることなく続けていく必要があります。

私たちは大人になり世の中を動かすときが来ます。その時、平和への歩み、努力がしっかりと続けられる様に、それぞれが戦争について学んだり平和について考えておくべきです。

あなたも考えてみてください。

「平和とは何か」を。

平和作文集

発行 平成28年3月6日
小金井市

編集 小金井市企画財政部広報秘書課広聴係
小金井市本町六丁目6番3号
☎042-387-9818